０９・今までとこれから

本編０８から数時間後。
とある年の春。十八時ごろ。
大陸西部にある、主人公達の住む街。
天気は雨。気温は二十二度程度。

場所は、主人公の家で、たまに使っている小さな建物。
主人公とメルヤ、寝室のベッドに一緒に横になっている。

ＳＥ１　外の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【建物の中から、外の環境音が聞こえる】
【０―１０秒ほど流して『メルヤ』のセリフ】
【その後、フェードアウトする】

●正面　０センチ

「【※１回※　キスする。

主人公から唇を寄せられる、軽いキス】

ん……。

【幸せそうに微笑む。

トラック０８から今までの数時間、たっぷりと愛し合って、お互いが両想いである事を実感できたので。

これまでよりも、さらに距離が近づいている】

ふふっ。

【※３回※　キスする。

ちゅぱちゅぱ音を立てる、あまあまなキス】

ちゅっ❤

ちゅっ❤

ちゅ……❤」

ＳＥ２　メルヤがベッドで身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

メルヤ、時計を見ようと、少し動く。
これによって、少し距離が離れる。

●正面　15センチ
「【ふと壁の時計を見て。
どこか満足げに。
時間を忘れる程主人公といちゃいちゃできた事が、とても幸せなので】
あぁ……気がつけば、もうすっかり遅い時間ですわね」

メルヤ、キスをしようと、また近づく。
これによって、距離が近づく。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
ちゅぱちゅぱ音を立てる、あまあまなキス】
ちゅ❤」

メルヤ、会話する為に、少し離れる。

●正面　１５センチ
「【穏やかに優しく。
今、この時を機に、これまでの自分の事と、これからの事について話そうと考えたので】
ご主人様。
少しだけ。
ご主人様に出会うまでの話をしても、よろしいでしょうか？」

〈主人公〉
「……うん！　もちろんいいよ、どうしたの？」

主人公、当然だと言わんばかりに即答し、続きを促す。
それを見て、メルヤが優しく微笑む。

●正面　１５センチ
「【穏やかに嬉しそうに。
ここからしばらく、これまでの己の人生について語っていく。
特に感情は交えず、ずっと穏やかに、落ち着いたトーンで話す】

ありがとうございます。
私（わたくし）は、淫魔の母親と、獣人の父親の間に生まれました。
ですが、父親の顔は見た事がなく、母親は私（わたくし）が幼い頃に出奔。
これを不憫に思ったハールス様に拾われ、チハ達数名と共に、彼の城で召使いとして暮らしてきました。
【前の雇い主である、ハールスについて述べる。
ハールスは典型的な『胡散臭い、悪いおじさん』で、評判の悪い人物である。
しかし、教育には非常に力を入れており、領民だけでなく、使用人達にもしっかりとした教育を受けさせていた。
特に亜人には特別な感情があったらしく、メルヤ達は、使用人としては破格の扱いを受けて暮らしていた。
イザベラが真っ先に狙ったのも『商品として品質が高い』と判断したからである。
メルヤはそれを『過去ハールスに亜人の友人や想い人がいたからなのではないか』と考えている。
また、このような経緯から、亜人の少女達は、ハールスに対してそこまで悪い感情はない。『ろくでもないおじさんで、とても彼の味方をする事はできない。だが、自分達の事を責任持って育てようとしてくれた事は間違いなく、彼を嫌う事も出来ない』というスタンスである】

あの方は、決して良い領主とは言えませんでしたが……。
亜人には、特別な思い入れがあったようです。
使用人として生きていけるように、しっかりと教育していただきました。
【一呼吸おいて、話を続ける。
このような経緯もあり、メルヤは自分を『不幸だ』と思う事はなかった。
むしろ『この地方で生まれた淫魔としては、破格の扱いを受けた。幸運だった』と思っている。
なので、当時は自分なりに、使用人としての人生に折り合いをつけていこうとしていた】
ですから、育てて頂ける事を僥倖（ぎょうこう）と受け止めて。
生涯、同じ城で暮らしていく。
それが私（わたくし）の人生なのだと思う事にしていました」

〈主人公〉
「そうだったんだ……」

主人公、どんな言葉を返せばいいかわからず、相槌を打つのにとどめる。
ごく平和に進んできた自分の人生に比べ、メルヤのそれはあまりに過酷で。
感想を言うのもはばかられる気がしたからだ。

●正面　15センチ
「【少し声のトーンが下がる。
メルヤは使用人として、確かにとても幸運だった。
だが、一人の女性として幸福かと言うと『どちらともいえない』状況にあったので。
どうしても、もっと自分らしく生きる事や、恋をする事を夢見る事があったので】
だけど、時折、憧れる事があって……。
こんな私（わたくし）でも、いつか誰かを心から愛したい。
その方の為に尽くす事を、生きる意味としたい……。
そう考える事が、ございました」

〈主人公〉
「……」

●正面　15センチ
「【少し自嘲気味に。
当時を回想して、
『当時は絶望した。やはり、そのような夢は、私には分不相応だったと感じた』という

感じで】
ですが、そのような夢も、イザベラに捕らえられた瞬間に終わり。
これからは、生きていても死んでいても変わらないような日々が始まるのだと思っていました」

SE3　メルヤがベッドで身体を動かす音2
【最初から最後まで流す】

メルヤ、身体を動かして、主人公に手を伸ばす。
そして、手を握る。
主人公はそれを、強く握り返す。

●正面　15センチ
「【穏やかに優しく。
主人公に微笑みかけながら、自分に取って、いかに主人公が大切な存在であり、生きる希望であったかを述べる】
でも……貴方様がお救い下さった。
心を亡くすのを待つばかりだった私（わたくし）に、未来を下さった……。

貴方様は、私（わたくし）の希望そのものです。
貴方様があの時行動して下さったから、今の私（わたくし）が。
【一度『私』と言ったところを『私達』と言い直す。
救われたのは自分だけではなく、亜人の少女達全員なので】
いえ、私（わたくし）達がいるのです」

〈主人公〉
「……ありがとう……。
そんな風に思ってもらえて。すごく嬉しいよ……！」

●正面　15センチ
「【ここで話題を変える。
少しかしこまりつつ、少しコミカルに。
ここから、主人公が騎士をやめてしばらく無職になるだろう事、その間は、自分が支えようと思っている事を伝える。
メルヤは、主人公との将来のためにすでに動き出しており、それについて報告したいので。
※ここから先の『コミカル』という表現は『真面目な話であり、主人公にとっては、聞い

ていて楽しいだけの話だけではない。だが、前向きな話なので、重たくなりすぎないように話す』というイメージでお願いします】

ですから、その。

このような話を切り出すのは、私（わたくし）としても少々心苦しくあるのですが……。

ここからは、今後のお話をさせて下さいませ」

〈主人公〉

「！　なにかな……？」

しかし、ここで急に話題が切り替わった。

主人公、驚きつつも姿勢を正して、また続きを促す。

●正面　15センチ

「【少し照れて。

少しかしこまりつつ、少しコミカルに。

つい数時間前まで自分を『主人公の恋人』と認める事さえためらっていたのに、これから話す事は、まるで『恋人』を越えて『妻としての決意表明』という感じになるので】

あの……ですので。

【勇気を出して言う。
これからは主人公の恋人として、主人公をしっかり支えていきたいので。
これからは自分の事を卑下したり、謙遜しすぎたりせず、与えられた評価を正しく受け止めて、前向きに生きていきたいので】

もし、今後。
ご主人様が正式に騎士をお辞めになって。
新しいお仕事が見つかるまでの間は、私（わたくし）がお支えします。
実は、今回の件で、騎士団の皆様からお墨付きを頂きまして。
ハールス様の城にいた頃の経験と、淫魔の力を生かして、この街の病院で働かないか…
…と誘っていただいているのです。
お受けしようと、思っています」

〈主人公〉
「えっ……！　すごいね、めーちゃん！
あっ……だから、さっき病院で誰かと話してたの？」

●正面　15センチ
「【穏やかに微笑んで。

ひとまず『例の看護師もメルヤの再就職の件を知っており、その事も少し話した。だが、それだけではない。主に、主人公の処分を軽くするための活動について話していた』という事については伏せておく】

……はい。先程も看護師様と、その件について相談していたのです。

【穏やかに微笑んで。

『主人公は今、将来に不安を感じているかもしれないが、絶対に自分が支え、助ける』と決意しているので】

だから……どうかご安心下さいませ。

今度は私（わたくし）が、働いて。

貴方様をお支えしますから……！」

〈主人公〉

「うえーん……！」

●正面　15センチ

「【少し驚いて。

まさか、主人公がいきなり泣き出すとは思っていなかったので】

あ、あら……！」

〈主人公〉
「嬉しいよう、めーちゃん……。
めーちゃんの気持ち、とっても嬉しい！」

●正面　15センチ
「【穏やかに微笑んで。
自分達亜人の少女達にとってヒーローである主人公の素の人柄は、このように親しみやすく、偉ぶらず、可愛らしいものである事がとても嬉しく、またそれがいとおしいので】
そのようにおっしゃっていただけて、光栄ですわ」

〈主人公〉
「わたし、これから無職になっちゃうから。
めーちゃんに迷惑かけないか、嫌われちゃうんじゃないかって心配だったの。
なのに、そんな風に考えてくれてたなんて……」

●正面　15センチ
「【笑って、可愛く怒る。

また、きっぱりと言い切る。
自分には『己に自信を持ってほしい』と言うくせに、自分自身はなかなかそれができずにいる主人公を、断言する事で鼓舞する】
とんでもありません。
どのようなご主人様でも、私（わたくし）には、かけがえのない、素晴らしいお方です」

〈主人公〉
「わたし、これから無職になっちゃうから。
めーちゃんに迷惑かけないか、嫌われちゃうんじゃないかって心配だったの。
なのに、そんな風に考えてくれてたなんて……」

●正面　15センチ
「【穏やかに、嬉しそうに笑う。
泣いている主人公がとても可愛らしいので。
また、自分としては当然のように考えていた事で、主人公がとても喜んでくれたので】
ふふっ。
ご主人様は誰よりも勇敢なのに、少々泣き虫でいらっしゃるようですね。
【※マークまで、優しく、そっと言い聞かせるように、主人公を励ます。

どんな時も必ず自分は味方であり、そばにいるという事を改めて伝える】
大丈夫です。
いつもこの私（わたくし）が、貴方様の側におります。
どんな困難な事でも。
ご主人様と一緒なら、乗り越えられると信じておりますから……❤」※

メルヤ、近づいて、主人公の左耳にささやく。
これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく
「【優しく、そっと。
とても嬉しそうにささやく。
泣いている主人公に、優しく愛を伝えたいので】
お慕いしておりますよ、ご主人様。
もう、絶対に離れません。
大好きです……❤」

メルヤ、主人公の左耳にキスする。

●左　0センチ

「【※1回※　キスする。

ちゅぱちゅぱ音を立てる、あまあまなキス】

ちゅっ❤」

ここでフェードアウトして終了。